

マルクス主義文化研究の再検討

初期マルクス主義文化研究会

大月功雄（代表者、社会学D5）・秋田市太郎（法学M1）

下村晃平（社会学D2）・福井優（文学D1）・楊雨双（社会学M1）

初期マルクス主義文化研究会

○研究会の課題

- ・本研究会は、1910年代から40年代にかけて展開されたマルクス主義の文化研究の方法論的な再検討をおこない、現代の文化研究に新たなパースペクティヴを導入することを目的としている。
- ・いわゆる「文化論的転回（culturalturn）」以降、文化研究は、従来のマルクス主義的な文化研究が「社会的存在（階級）」の単なる反映物とみなしてきた文化領域のなかに、文化領域それ自体が社会的存在を捕捉し構築していく契機をみいだすことによって、新たな文化研究の領野を切りひらくこととなった。
- ・本研究会では、かつて「文化論的転回」が階級還元論として棄却してきたマルクス主義文化研究の伝統のなかに、ほかならぬ「文化論的転回」以降の文化研究の新たな枠組みの可能性を探索する。
- ・ファシズムとその前夜を生きたマルクス主義文化研究のアクチュアリティを掴みだし、現代の文化研究の方法のなかに据えなおすことが、本研究会の課題である。

○主なテキスト

- ・ジョージ・ルカチ『魂と形式』（1911）、エレンスト・ブロッホ『この時代の遺産』（1935）、ヴァルター・ベンヤミン『ドイツ悲劇の根源』（1928）、エーリッヒ・アウエルバッハ『ミメーシス』（1946）、戸坂潤『日本イデオロギー論』（1935）、ロシア・フォルミズム論など。

W・ベンヤミン『ドイツ悲劇の根源』①

○『ドイツ悲劇の根源』（1925年）

- ・本書は、ドイツの思想家・ヴァルター・ベンヤミン（1892-1940）が、1925年にフランクフルト大学哲学部美学科に提出し、自主撤回した教授資格申請論文である。
- ベンヤミンは、本書の目的を「〈アレゴリー〉——その本質をこそほくは救出したものだ」（1924年12月22日、グリンホルツ・ショーレム宛て）と語っており、ドイツ文学史のなかで忘却されていたパロック悲劇を掘り起こすことで、その「アレゴリー」という形式の再評価を試みた。
- ・本書では、第1部「パロック悲劇とギリシア悲劇」で、ギリシア悲劇とパロック悲劇の違い（またそれまで両者はなぜ混同されてきたのか）を論じ、第2部の「アレゴリーとパロック悲劇」で、パロック悲劇のアレゴリー論（アレゴリーと象徴はどのようなものか）を展開している。

○パロック悲劇のアクチュアリティ——ドイツ表現主義と〈意志〉の時代

- ・「パロック時代の胸心ぶりと、最近のまた現在のそれ〔表現主義〕との類似は、歴然としている。無理矢理の誇張が、両者に特有のものである。……芸術の最高の現実とは、孤立した、閉じて完結した作品にほかならない。だが、エピソードだけが完成した作品を達成しうる。そういった時代がときおりやってくる。それが、芸術の〈凋落〉の時代、芸術の〈意志〉の時代なのである。……パロックのアクチュアリティは、この〈芸術〉意識に基づいている」（上巻87-88頁）。
- ベンヤミンは、その完成度から「芸術作品」とは見做されないパロック悲劇のなかに、同時代の表現主義と同様の〈意志〉を救い出そうとしている。

E・ブロッホ『この時代の遺産』①

○『この時代の遺産』（1934年）

- ・本書は、ドイツのマルクス主義哲学者エレンスト・ブロッホ（1885-1977）が、1920年代から30年代前半にかけて執筆したさまざまな文章をもとに出版したものである。この本が出版された前年の1933年は、ヒトラー内閣が成立した年である。崩壊寸前の経済のもと、生活は苦しく先が見えない不安定な社会のなかで、ドイツの人々が自身の希望と未来を託したのは、他ならぬこのナチスであった。そこでブロッホが本書で試みたのは、人々がナチスへの「陶酔」に向かう力学とそれに対し左派はなぜ無力だったのかの分析、そしてファシズムに抗するためのマルクス主義の立て直しであった。

○「正統派」マルクス主義への批判

- ・ブロッホの問題意識のひとつは、怒りなど人々が社会に対して高ぶらせる感情の源泉を哲学的に探求することであるが、彼はマルクス主義がその点を分析できていないと考える。彼にとって「正統派」マルクス主義は、自らの理論を「科学的」なものとして精緻化しようとするあまり、プロレタリアートの権益の構造を分析できても、なぜ人々がそこから社会に対する怒りを持つにいたるのかを説明できない。ゆえにブロッホは、大衆のなかに潜在している社会を変える怒りの力を左派のもとに束ねるため、「正統派」マルクス主義にはない視点を提供する。それが「非同時代性」という概念である。

E・アウエルバッハ『ミメーシス』①

○『ミメーシス：ヨーロッパ文学における現実描写』（1946年）

- ・ドイツ生まれのユダヤ人で、中世ロマンス語文学で博士号を取得したエーリッヒ・アウエルバッハ（1892-1957）は、ナチス政権下に国外追放に遭い、トルコにて命し、その地で文献が不足しているにもかかわらず本書を記した。
- 本書は、中世文学という本来の専門を遥かに超えて、「ミメーシス（模倣）」をキーワードに、ホメロスや旧約聖書から、ローマ古典文学、中世文学、さらには近代リアリズム小説、20世紀のヴァージニア・ウルフにいたる、壮大な歴史的視野をもったヨーロッパ文学史となっている。

○「ミメーシス」概念をめぐって

- ・ミメーシスは、プラトンが『国家』第10巻で芸術を定義するために用いて以来、芸術論のなかで芸術＝模倣論として、度々議論になってきた概念である。プラトンはアイデアを第一に置き、自然を第二に置き、自然を描いた芸術を第三に置いている。
- これまで、自然はアイデアの模倣であり、芸術は自然の模倣であるので、芸術は模倣の模倣に過ぎないという低い評価を与えられていたとする解釈が一般的であった。
- このような否定的なミメーシス解釈に抗して、ミメーシスを肯定的に解釈する議論も行われてきた。従来ミメーシスは imitation（模倣だが偽物という含意がある）と訳されてきたが representation と訳される議論が1970年代のフランスで起こり、ポール・リクールもまた「表象」という訳を受けて『時間と物語』において、再びミメーシスについて議論している。

「危機の時代」の文化研究

時代は腐敗し、しかも同時に陣痛に苦しんでいる。

——エレンスト・ブロッホ

○マルクス主義文化研究の時代背景

- ・第一次世界大戦後のドイツは、厳しいインフレを背景として左右の政治勢力が激しく対立していたが、文化的には「黄金の1920年代」と呼ばれるような活況を呈した。ヴァイマルには国立パルクハウスが建設され、ハンブルクにはヴァールブルク文庫が開設され、フランクフルトには社会研究所が設立された。1920年代は世界的に文化が花開いた時期であるといえる。
- ・しかしながら、1929年に始まった世界大恐慌が状況を大きく変える。資本主義の根本的危機に直面した民主主義諸国は、自由主義を手放すことで問題を解決しようとした。ファシズム、ナチズム、ニューディールの台頭はその表れである（W.シュヴェルプシュ『三つの新体制』）。
- ・このような大転換の時代において、マルクス主義文化研究は、危機の時代の徴候を文化産業に見出すことになる。しかし、彼らの文化研究は単なる表象分析に終始しない。なぜなら「文化的無秩序は経済的諸関係とそこから派生する利害対立とかかわりを持つ」（ホルクハイマー「社会の危機と科学の危機」）からである。彼らにとって、文化研究とは危機の「根源」を探究し、どのような「未来」を希求するのかを問う営為にはかならなかった。

W・ベンヤミン『ドイツ悲劇の根源』②

○ギリシア悲劇とパロック悲劇——「王」の悲劇的死の意味をめぐって

- ・人間の歴史に対する自然の暴力であるところの「運命」は、究極的には人間の「死」を意味する。パロックにおける「死」とは「罪を負った生が自然的な生の法則の手に落ちてしまったことの現われ」（上巻287頁）である。
- ・ギリシア悲劇と共同体：「ギリシア悲劇的死は二重の意味をもっている。……神々の古くからの法を失効させるという意味、および、新しく成り来たった人類の初穂として英雄を未知の神に捧げるという意味である」「苦悩する英雄の姿を目の当たりに見て、共同体は、英雄の死が授けてくれた言葉に対する、畏敬のこもった感謝を学ぶ」（224頁）。
- ・パロック悲劇とメランコリー：「近代悲劇は、悲しくさせる劇ではなく、悲しみが満足を見出すための劇……悲しんでいる人びとの前で演じられる劇」「近代悲劇には、ある種のこれみよがしなところがある。その各場景は、見られるために呈示され（る）」（255頁）。
- ベンヤミンからみれば「ハムレットの死は、その著しい外面性（毒を塗った剣で死ぬ「間抜けな死」）において、近代悲劇特有のものである」（301頁）。死によって人間世界に意味を生み出す英雄などはおらず、ただ「運命（自然の暴力）」だけがその主人公である。

○象徴とアレゴリー——断片的なものの「構成」

- ・「人物的なものに対する事物的なものへの優位、総体的なものに対する断片的な優位によって、アレゴリーは象徴の対極をなしつつ……強大なものとして、象徴に対抗する」（下巻71頁）。
- アレゴリーは象徴のように、ある瞬間のある人間に総体（理念・概念）を仮象化させるのではなく、つねに断片的なものとして事物に語り続ける。「目標を正確に思い描かぬままにひたすら断片を積み上げてゆくこと、および、奇跡をたえず待望しつつ繰り返しを高めると見なすことは、さまざまなパロック文学作品に共通する」（52-53頁）。

参考文献：W・ベンヤミン『ドイツ悲劇の根源』（鴻巣二朗訳、ちくま学芸文庫、下巻、1999年）

E・ブロッホ『この時代の遺産』②

○非同時代性

- ・『この時代の遺産』において「非同時代性」とは、「正統派」マルクス主義が現代を資本家とプロレタリアートの関係として見るのが「同時代的」な分析と言えるのに対し、人々が社会に対し怒りの感情を持つこと、その感情を駆動させている何かは過去のある出来事に源泉をもっている、と考える概念である。ブロッホは、同時代的な見方を否定するわけではなく、この非同時代的な視点が無いために、マルクス主義はファシズムに對しなすべがなかったと考える。
- このうち、ブロッホからすればナチスの手法こそ、この非同時代的な要素を利用して人々を熱狂させたものであるからだ。ゆえにブロッホは、左派の陣営もまた非同時代的な領域で戦線を張らなければならないと考える。ブロッホにとってその具体例の一つが「モンタージュ」である。

○モンタージュ

- ・非同時代的な領域にあり人々の感情に媒介するものひとつは、小説やおとぎ話（メルヘン）、音楽などといった文化的・芸術的作品である。ブロッホは、「新即物主義」のような物事をリアリズム的に描写する芸術に否定的である。というのもしれば、その事物が内蔵するはずの非同時代性を捨象するからだ。そうではなく、モンタージュの手法によって断片的な事柄を再構成し、それが過去にあった革命の再現であると同時に現代の私たちをも熱狂させる物語として提示することがブロッホの非同時代的な試みなのだ。

参考文献：E・ブロッホ『この時代の遺産』（池田英士訳、ちくま学芸文庫、1994年）

E・アウエルバッハ『ミメーシス』②

○『ミメーシス』の構成

- ・本書は文学や歴史書における現実描写の文体の歴史的変遷を扱っている。20章で構成され、それぞれの章で扱っている時代が異なる。必ず冒頭には文学テクニクのある場面の抜粋が提示され、その文体を具体的に分析していく、という論述の形式を取る。

○ミメーシスの文体分析

- ・悲劇には貴族や王族といった高貴な人物を飾り、讃える荘重体、喜劇には民衆といった卑しい身分や日常生活を描く謙抑体を用いるという古代の文学理論の限界が時代ごとに乗り延びていき、19世紀仏文学において民衆を悲劇として描く近代リアリズムの文体に至った。

○20世紀の現実描写

- ・最終章では近代リアリズムとは違い、主観の重層性も「現実」のなかに含めようとする試みや、長い年代記小説ではなく、一日だけを描くといった短い期間の詳述なかで現実の重層性を描くといった20世紀文学の評価も行っている。

○フィグラ（形象）理論

- ・第一章は旧約聖書とホメロスの文体を対比させる高い分析で始まるが、ここで聖書文学の文体を定義する重要な概念として「フィグラ」の概念が提起される。聖書文学では、具体的な場所の提示や人物の外見の描写は徹底的に排除され、解釈を要求する文体となっている。そこでこの解釈では、「時間の経過は暗から後に進む」という現代の自然科学的な因果理解ではなく、先のもので後のものを予告していた、後のものは先のものの実現であった、など時間の前後を超えて2つの事件や人物が神の意志のもとに一致するという解釈がなされる。

参考文献：E・アウエルバッハ『ミメーシス——ヨーロッパ文学における現実描写』（飯田一・川村二郎訳、筑摩書房、下巻、1967年）